2022年4月24日 川越教会

丸山　勉

讃美の復活

［ヨハネによる福音書20章19～29節]

その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた。そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。そう言って、手とわき腹とをお見せになった。弟子たちは、主を見て喜んだ。イエスは重ねて言われた。「あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。」そう言ってから、彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい。だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」十二人の一人でディディモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたとき、彼らと一緒にいなかった。そこで、ほかの弟子たちが、「わたしたちは主を見た」と言うと、トマスは言った。「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。」

さて八日の後、弟子たちはまた家の中におり、トマスも一緒にいた。戸にはみな鍵がかけてあったのに、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。それから、トマスに言われた。「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」トマスは答えて、「わたしの主、わたしの神よ」と言った。イエスはトマスに言われた。「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである。」

[１]　「怪物」を恐れず進むこと

私がこの所CDなどでよく聞くミュージシャンがいて、小沢健二という人なのですけれども、一番よく知られているのは『カローラⅡに乗って』というCMソングなのですが、それは彼が作った歌ではなく、彼の作った歌は例えばポップな曲調の中にも、結構意味が深いと言いますか、聞く人に解釈を任せるような歌が殆どで面白いのです。彼は一度はミュージシャンとして活動を停止していた謎の10数年があったのですけれども、その後再び帰還をしまして、例えば今から5年ほど前には「フクロウの歌が聞こえる」という歌を作りました（歌：小沢健二とSEKAI NO OWARI）。その中にこんな歌詞があるのですね。

**「渦を巻く宇宙の力　弱き僕らの手を取り　強くなれと教えてくれる**

**ちゃんと食べること　眠ること　怪物を恐れず進むこと**

**いつか孤高と協働が　一緒にある世界へ　La la la la la」。**

私はとても聖書的・福音的な匂いを感じるのです。彼の90年代の曲に『天使たちのシーン』という名曲があるのですが、その中には**「神様を信じる強さを僕に　生きることをあきらめてしまわぬように」**という歌詞もあるのです。‟神様を信じる**「強さ」”**ですよ。殆ど「ゴスペル」だと言っても良い。小沢健二さんは所謂クリスチャン音楽家ではありませんが、聴くととても励まされるのです。

なぜこんな話をするかというと、歌とか音楽というものが本当に人生を豊かにしてくれるものだと思うと当時に、今日の聖書箇所から、弱かった弟子たちが復活の主と出会ったとということは、この歌で歌われていたように、上からの力を得て「弱い者が強くされた」ということ、「怪物を恐れずに」生きるようになった、ということではないかと思ったからです。

［2］ 恐れの扉を超える平和の挨拶

今日の聖書箇所は、復活された主イエス様との出会いの記事です。しかし「出会い」という言葉は綺麗すぎるかもしれません。むしろ、一方的にイエスに掴まえられた、と言った方が良いかもしれないそういう出会いです。初めはトマス以外の10人が沈黙してひたすら家の中に閉じ籠り、鍵までかけていたと言うのです。セキュリティー万全に「誰も入って来るな」と。ある意味この世界から姿を消していたのです。自分で自分を守る、しかしそのことによって何か違う「怪物」に捕らわれているような感じです。何と弱い、そして何と人間臭い、私たちの兄弟のような存在ではないでしょうか。しかし、その恐れのセキュリティーを難無く乗り越え、復活の主イエスが彼らの真ん中に立って、「あなた方に平安（平和）があるように！（シャローム！）」と声をかけられ、この弱かった弟子たちに息を吹きかけ、御業のために派遣もされるのです。

また、更に24節以下には、10人の弟子たちが集まっていたその場には居ることがなかったトマスのことが書いてあります。彼は他の弟子たちから「私たちは主を見た」と聞くと、トマスは「わたしはこの自分で見て、そのイエス様の傷跡に手を入れてみなければ決して信じない」と言い張ったとあります。ここからよく「疑い深いトマス」とか「実証主義者トマス」とか言われてしまいますが、でも他の弟子たちでも同じだったのではないかと思います。彼はその場に居ることが叶わず、自分がとても置いてけぼりを食ったようなある種の絶望感、孤立感を感じていたのではないでしょうか。自分には主は現れて下さらないのか、という深い寂しさ、焦りが先ほどの言葉にはあるように思うのです。彼もまた私たちの兄弟です。しかし彼の物語がここに記されていることは恵みだと思います。人生には、そんな言ってみれば「何で俺だけが、私だけが…」と他人には言えないことに出会うということがあると思うからです。私にも覚えがあるのですが、そういう時は自分の殻に閉じこもり、どこか不機嫌になってしまうのです。自分で自分を慰めているだけですと、他者の声は入って来ません。不機嫌になり、そしてその不機嫌には正当性があると思ってしまうのです。身に覚えがあるのです…。でもこれは何の良い点もないですよね。本当は自分自身がそのこと分かっているのです。しかし、そこから抜けられなくなってしまう。「怪物」に、サタンに摑まってしまうのです。己の力では無理なのです。むしろ鍵までかけてしまっている。

しかしその不機嫌の扉を飛び越えて入って来て下さる方がいる。そんな、内へ内へと苦しくなっていく私たちの所に、ここでも、主が何と言われて入って来られたか。「あなた方に平和があるように！」。‟平和の挨拶”です。よくクリスチャンが手紙などで、まず「主の平和」と書いて綴ることがありますが、それはここから来ています。「主の平和」。そうです。私たちは、主が私たちの閉ざされた心の中に「安かれ」と入って来て下さるから、私の信仰深さや立派さの故では全くなく、この主の愛と赦しと優しさのゆえに、「神様を信じる強さ」も持たせて頂くことが出来るのです！「生きていくことをあきらめてしまわぬ」ようにです。

主は、置いてけぼりになったトマス一人に向かって、十字架の傷跡を示されながら、トマスが語った言葉をなぞるようにして語りかけました。主は聴いておられたということですね。「あなたの指を私の手に当ててごらん。また手も伸ばしてわたしの脇に入れてごらん」と。聖書はトマスが手を伸ばしたとは書いておりません。もうその主の言葉で十分だったのです。そしてこの言葉が思わず出た。「わたしの主よ、わたしの神よ！」（20:28）と、心からの「ごめんなさい」と「ありがとう」が一緒になった信仰告白。彼の目は熱くなっていたに違いないと思います。

［3］ 「讃美」は魂の解放の出来事

このトマスの物語の時から、本当の意味で「信仰の時代」が始まったと思います。「あなたはわたしをを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は幸いである」（20:29）とイエス様は仰いました。私たちはこの地上の旅の途上では肉眼でイエス様を見ることは出来ません。それで良いのです。しかし、聖霊を送り、またみ言葉を通し、今も親しく私たちに臨んで下さっています。―「わたしはあなたを捨てて孤児とはしない」（ヨハネ14:18　口語訳）。これが私たちの救いです！

今日の週報で、礼拝での賛美についての江原美歌子さん（教会音楽室長）の文章を引用させて頂きましたが、こういう文章です。―「**コロナ感染対策による制限により****「賛美歌を歌わないことに慣れてきてしまっているのが怖い」と、先日耳にしました。…スペイン風邪流行における教会の対応を検証した『100年前のパンデミック』(富坂キリスト教センター編)では、「日本の教会はその経験から学ぶことをしなかった。信仰的・神学的問いかけとは受け止めなかった…そして忘れてしまった」と報告されていました」―と。**

「賛美歌を歌わないことに慣れてきてしまっているのが怖い」。この感覚は大事ではないかと思います。私は、敢えてこういう言い方をすることをお許し頂きたいのですが、（コロナを無視しろと言うのではありませんし、他者への配慮はとても必要だと思っています）、私は「讃美」以上に信仰の「感染力」を持っているものはないのではないかと思います。私自身も礼拝で歌われている讃美で導かれたと言っても過言ではありません。「讃美」というのは、魂の解放の出来事なのです。私たちは皆「讃美」することを知らなかったのですから。あの弟子たちのように、トマスのように、心に誰も入れたくないように鍵をかけていたのですから。神様も締め出す。けれどもそれでは魂が死んでしまう。呼吸が止められてしまう。もう一度本当に呼吸が出来るように復活のイエス様が、私たちの中に入り、私たちの中に住んで下さる。私の心の中の荒野に天幕が張られて、そこに主の臨在があって、共に旅をするのですね。―「後の世代のためにこのことは書き記されねばならない。『主を賛美するために民は創造された』」（詩編102:19）。

主イエスの復活とは、私たちの人生の中の「讃美」の復活です。あなたのための十字架（の傷）だ！とイエス様が私たち一人ひとりに優しく、そして鋭く迫ってくることがあるとすればそれこそ聖霊の導きです。あなたを主が独りぼっちにしない確かな証です。自分で握りしめていた拳を主に開けて頂いて、可能な限り「あなたこそわたしの主です！」と、声と、腹と、生活をもって賛美し続けようではありませんか。教会から讃美が無くなくなることは決してありません。「二人、また三人がわたしの名によって集まる所に、わたしもいるのである」（マタイ18:20）。

お祈り致します。

復活の主イエス様、あなたは丸一日の死の闇の土曜日を経験し、その後、朝の到来と共に復活して下さいました。そして、「もう神がいない」という深い恐れの中にどうしようもなく閉じ籠っていた弟子たちを訪ねて下さいました。今、私たち一人ひとりをも訪ね「平和あれ！」と声をかけて下さることを感謝します。私のために愚かになって十字架にかかって下さったあなたを信じ、私もまた愚かになってあなたを讃美し、証しし続ける生涯へと導いて下さい。皆の内なる祈りに合わせ、主イエス・キリストの御名によってお祈り致します。アーメン。